

日本語學習書

日本語讀本 二

國際學友會日本語學校編

日本語學習書

日本語讀本二

國際學友會日本語學校編

字、この巻二で四百三十一字を提出しているから、全部で七百三十一字を提出したことになる。

- 七、 本書では、語の本領を正しく理解させるために、新聞記事、手紙文の実例などを除くほかは、全文をわかち書きにした。わかち書きは、接辞、助詞、助動詞は上の語に読けて書き、その他ははなして書くのを原則とした。しかし、特に一語のように使用されているものは続けて書いた。

欄外に書き出した漢字は、新出と読みかえの漢字で、新出漢字はそのまま、読みかえの漢字には○をつけて区別した。

なお、各課の終わりに、新出漢字と読みかえ漢字を出し、それに | の符号をつけ、それぞれにふりがなをつけて学習の便宜をはかった。

更に、各課のあとに、学習の手びきをそえ、学習目標を確かにするとともに、効果的に学習が進められるように配慮した。

- 八、 本書は、約三百時間の授業時数を予定して編集したものである。しかし、これに固執する必要なく、地域差、個人差などの関係を考慮して有効に活用されたい。

- 九、 本書の編集には、もっぱら本校日本語教授鈴木忍、阪田雪子が、これに当たったが、本書が成立するについては、本校職員はもとより、外部からもなみなみならぬ助力のあったことを付記しておく。

昭和三十三年二月

国際学友会日本語学校

字体も当用漢字字体表によった。かたかなは、擬音語、外来語、外国の地名・人名を書くのに用いたほか、語音表記、電報文、及び、一部の動物名、植物名などを表わすのにも用いた。

- 五、 日本語読本の内容は、編者の執筆になるものが大部分であるが、既成作品からの引用もある。それらに対しては著者名を掲載した。ただ本書の性質上、当用漢字、現代かなづかいの適用などをはじめとし、教育上必要ないっさいの考慮を払わなければならないので、原作の趣を少なからず変えたところもある。原著作者にはこの点ご了承願わなければならない。

- 六、 本書は、日本語読本の第二巻で、内容は、あいさつ、対話、座談会、手紙、電報、日記、紀行、ラジオ放送、新聞記事、日本事情など、言語生活が円滑に営まれるような能力を養うに必要な言語場面を多く提出し、読解に際しては、不明の文字、語句は辞典を十分に利用して、できるだけ各自で解決できるような能力、習慣の養成をも意図した。また、将来文学作品、論説文などを読むための準備段階として、童話、物語、科学読物なども取り上げ、これによって、また読書意欲を高めるのにも役立たせようとした。更に、日本語の機能的な知識を与えることによって、それぞれの言語生活に反省の機会をもたせ、より望ましい言語生活を営む契機に役立たせるべく努めた。

漢字は、新出四百三十一字を、読みかえは二百五十一字を当用漢字別表から選んで提出した。当用漢字別表から、巻一で三百

あ　と　が　き

- 一、　この日本語読本は、外国人で日本語を学習しようとする者に対し、短期間に日本語を習得させようとする目的で編集した日本語学習書である。
- 二、　本校では、べつに「日本語の話しかた」と「よみかた」を編集した。この二書は、入門準備編としての役を果たすものであり、日本語読本は、この入門準備書のあとを受けて、読むことを中心に、聞く、話す、書くという四つの言語活動を本格的に学習させるためのものである。
- 三、　日本語読本は、全部で四巻からなっている。この四巻で、日本語による学習活動がやっていけるだけの基礎能力を得させようとするものである。したがって、取り上げた教材は日常生活的なもの、文学的なもの、文化的なもの、社会的なもの、科学的なものなど広い範囲にわたっている。題材の選定は、本校の現場で長く実験してみた結果、効果的に学習の展開のできる適切なものだけを取り上げた。
- 四、　かなづかいは、現代かなづかいによって統一した。漢字の使用は、当用漢字表、同音訓表を基準とし、範囲外のものにはふりがなをつけた。また、認められた音訓の範囲内でも、固有名詞など読みにくいものや、二様に読みうるようなもの、その漢字をその課で新出として扱わないものにもふりがなをつけた。

もくじ

一	わらい話	一
二	浦島太郎 うらしまたろう	一一
三	敬語	一八
四	ほうもん	二四
五	羽衣 はごろも —げき—	三四
六	たなばた	四三
七	お月見	四九
八	象の目方	五四



九	塩		五九
十	送金		六四
十一	かきえもん		六八
十二	キャンプ生活—日記—		七四
十三	星の世界		八六
十四	辞典の引き方		九〇
十五	汽車の旅		一〇四
十六	旅館にとまる		一一四
十七	電報文の書きかた		一二〇
十八	放送局の見学		一二四



十九	二十の とびら	一三六
二十	交通事故	一四一
二十一	日本の アルバム	一四八
二十二	病気の 予防	一五六
二十三	なぜか 理科	一六四
二十四	かなづかい	一六九
二十五	こうして 探検する たんけん パタゴニア 登山家や カメラマンたちの 座談会 ざだんかい	一七九
二十六	クラス会の 招待と 通知	一九〇
二十七	衣食住	一九六



二十八	二十四の	ひとみ—げんとうの	台本—	二〇二
二十九	新聞の	役目		二一八
三十	ニュース			二三二
三十一	権利と	義務		二三七
三十二	ひとふきの	ぶどう— ありしまたけお 有島武郎—		二四三

新出漢字表

あとがき



一 わらい話

(家)

一

貸家の ふだを いく度 はつても、子供が いたずらをして
すぐ はがして しまう。そこで、大家は いろいろと 考えた
末に、厚い 板に 「貸家」と 書いて、それを くぎで じよう
ぶに 打ちつけて 言った。

「これで 二・三年は もつ。」

二

寺(夜)庭

ある 寺の 小僧^{にぞう}が 夜ふけに 庭に 出て、長い 竹ざおを
ふり回して いる。

坊^{ぼく}さんが それを 見て、

星落

「いったい、何を して いるのか。」
と たずねると、小僧は、
「空の 星が ほしいので、打ち落とそうと して いますけれど、
なかなか 落とせません。」
と 答えた。すると、坊さんは こう 言った。



「ばかな やつだ。そんな ことが わからないとは 情けない。そんな ところから とどくものか。屋根へ 上がれ。」

三

ある 所に 村じゅうで いちばん けちだと いわれて いる チンと いう おじいさんが 住んで いました。そして、自分でも そうだと 思つて いました。

ところが、となり村に「出す ものは 舌を 出すのも いやだ。」という ものすごく けちな ソウと いう おじいさんの いることを 聞いて、ある 日 むすこに 向かつて こう 言いました。「うちでは、こんな に しまつして くらして いるのに、このう え しまつを したら、何も 食はずに くらさなければ ならない。いったい、となり村の ソウさんは どんな 暮らし

をして いるのか、行つて 教えを 受けて おいで。」

「はい、はい。『善^{ぜん}は 急げ』と 言いますから、さつそく 行つて、教わつて 来ましょう。」

そう 言つて むすこが 出かけようと すると、チンおじいさんが よびとめて、小錢を 一まい わたして 言いました。

「大先生の ところへ うかがうんだから、何か みやげを持つて 行かなければ なるまい。ちよつと 市場まで ひとつ 走り して、紙を 一まい 買つて 来て おくれ。」

むすこは さすがに 村じゅうで いちばんの しまつやの子 だけ あつて、一文で 二まいも 買える、いちばん 安い ぺらぺらの 紙を 買つて 来ました。

「感心、感心。一まいと 二まいとじゃ、倍 ちがうからね。」
おじいさんは 満足そうに、にこにこ しながら、一まいを 引

出しに しまい、あとの 一まいを また 半分に 切って、それに まるまると した ぶたの 頭を かきました。

「これなら 大先生に さしあげても はずかしはあるまい。」
チンおじいさんは それを 大きな かごに 入れて、むすこに 持たせました。むすこは その かごを 持って となり村の ソウ大先生の 家を たずねました。

ところが、あいにく 大先生は るすで、代わりに むすこが出て 来ました。

チンおじいさんの むすこは、ていねいに おじぎを して、教えを 受けるに 来た ことを 話し、大きな かごを みやげに出しました。

「これは、これは、ごていねいにおそれいます。あいにく、父が 不在で ございまして……。」

と言いながら ソウ大先生の むすこは かごの 中から ぶたの 絵を 取り出しました。そして、

「何も お返し する ものが ございませんが、まあ、みかんでも……。」

と言いながら、かごに みかんを 三つ 入れる かつこうをしました。

チンおじいさんの むすこは それを だいじそうに 持って 家に 帰りました。それを見て、チンおじいさんは 感心して、

「さすが 大先生だけ あって、ちがった ものだ。紙 一まいも 使って いない。」

と言いました。

ところで、こんどは 話が 変わって ソウ大先生の 家です。

夕方になって 大先生が 帰って 来ました。待ちかねて いた

むすこは　すぐ　となり村の　チンおじいさんの　むすこが　教
えを受けに　来た　ことを　つけました。すると　ソウおじいさん
は　さっそく　むすこに　聞きました。

「で、みやげを　何か　持って　来たかね。」

「はい、これです。」

むすこが　さし出した　ぺらぺらの　紙に　かいた　ぶたの　絵を
見ると、

「ふむ、これは　りっぱな　ものだわい。」

と、大先生は、みやげの　ぶたが　気に　いったのか、それとも、
となり村の　チンおじいさんの　けちゃんぼうに　感心したのか　わ
からないような　ひとり言を　言つて、

「お返しは　どうしたかね。」

と　むすこに　たずねました。

「みかんを 三つ 入れる かつこうを して 返しました。」
こう 言つて、みかんを つかんで かごに 入れる まねをし
て 見せると、大先生は 急に 声を 大きく して、

「この ばかものめが」

と むすこを しっかりつけました。

「その 手つきだと、よほど 大きいのを 入れたろう。なぜ も
っと 小さいのを 入れなかった」

新出漢字

屋 ^や 根 ^ね	貸 ^か 家 ^や
舌 ^た	末 ^{すえ}
向 ^む か ^う	厚 ^{あつ} い
小 ^こ 錢 ^{ぜに}	板 ^{いた}
市 ^{いち} 場 ^ば	寺 ^{てら}
一 ^{いち} 文 ^{もん}	夜 ^よ ふ ^け
感 ^{かん} 心 ^{しん}	庭 ^{にわ}
満 ^{まん} 足 ^{ぞく}	星 ^{ほし}
	落 ^お と ^す
	情 ^{なさけ} け ^{ない}